

批評家・小林秀雄の誕生 —— 宿命としての批評の文体 ——

坂 田 達 紀

(平成17年9月30日 提出)

小林秀雄は、若年の頃小説家になることを夢見て、実際に数篇の小説を書いたにもかかわらず、結果的には、これを断念して批評家となった。本稿では、その理由および小林が「小説家」から批評家へと転位した過程を、文体論の立場から明らかにすることを試みた。まず、小林の処女作とされている小説「蛸の自殺」(大正11年)の表現を分析して、大きく四つの特徴を析出した。ついで、これらの特徴が、後の小林の批評の文体と軌を一にするものであることを三つの観点から示し、最終的に、小林が小説を断念して批評を書いた理由は、小林が小説の文体を持っておらず、批評の文体を持っていたからであり、したがって、小林は、「小説家」から批評家に転位したのではなく、元来批評家であった、との結論を得た。併せて、小林が小説を書くという夢を完全に断ち切り、己の宿命を積極的に受け入れて真の批評家となった時期を特定し、それが昭和11年頃であることを指摘した。

キーワード：小説「蛸の自殺」の表現、批評の文体、元来の批評家、小林秀雄の宿命

I

小林秀雄がそれまでには無かった新しい批評を創出して、文芸ジャンルに占める批評の位置を高めることにより、日本における近代批評の創始者・確立者と呼ばれることは、今や文学史上の常識となっている。

だがしかし、小林は何故批評を書いたのか、小説を志していたにもかかわらず。そして、小林の書いた新しい批評とはどのようなものであったのか。

かつて江藤淳は、批評家・小林秀雄誕生の過程を克明に跡付けた、小林研究の白眉とも言うべき江藤(1961)を、「人は詩人や小説家になることができる。だが、いつたい、批評家になるというこ

とはなにを意味するであろうか。あるいは、人はなにを代償として批評家になるのであろうか。すくなくとも私にとっては、小林秀雄を論じようとするとき、最初に想起されるのはこの問題である。」(7頁)と書き起している。また、江藤と同じく小林秀雄研究の礎を築いた吉田熙生は、吉田(1987)において、小林の批評家としての「原イメージ」を論じたが、この試みは、谷沢永一から「あの論文で吉田君が批評の概念とか考え方とかというものの底にある評論家の原イメージというものを取り出してきて、それを考察の根本に置いた。それによって昭和期のむずかしい文芸評論の検討方法について一つのお手本を示した。」¹⁾と高く評価された。比較的新しい論考では、山崎(1992)が「私は、つい最近まで、小林秀雄ばかり

読んできたし、また考えてもきた。そこでいつも私が気になっていたのは、小林秀雄の批評の起源がどこにあるかということであった。」(216頁)と述べ、その起源を明らかにすることを試みている。

これらの論考以外にも、小林秀雄の批評の起源あるいは小林の批評家としての原点を探究する試みが、これまでに数多く為されている。このことは、日本における近代批評成立の過程、いわばその舞台裏を知ることが、十分に魅力的であると同時に重要であることを物語っている。本稿においても、小林秀雄の初期小説の表現と批評のそれとの関連性を分析することにより、小林が小説を断念して批評を書いた理由、および、小林が「小説家」から批評家へと転位する過程を、文体論の立場から明らかにしたい。なお、本稿で分析の対象とする小林の小説は、処女作とされている「蛸の自殺」を中心とする。

II

「蛸の自殺」は、大正11年11月、小林秀雄二十歳のときに雑誌『蛩音』第三輯に発表された、小林の処女作とされている小説である。しかし、小林の死後、昭和58年4月、『新潮』第80巻第5号(小林秀雄追悼記念号)に掲載されるまでは、我々一般の読者は目にすることのできない、いわば幻の小説であった。『新潮』同号には、掲載に至る経緯が編集部によって付されているが、その中に、「後年の小林氏のすべての芽を含むようなこの野心作」(344頁)とある。この記述が正しいかどうかはもちろん検討を要するとしても、少なくとも、現時点では小林の最初の作品とされているという意味で、そして、公開されてまだ20年ほどしか時間が経っていないという意味で、「蛸の自殺」は、検討する価値の大きい作品だと考えら

れる。したがって、ここでは、「蛸の自殺」の表現にどのような特徴が認められるかを分析する。

まず指摘できることは、所謂私小説的な性格がきわめて強い、ということである。つまり、小林の実人生と符合する表現が随所に見られるのである。たとえば、次の会話表現²⁾では、主人公「謙吉」の「母」と「妹」とが話題にされているが、小林の母精子が肺を患って大正10年から鎌倉に転地療養していたこと、および、小林の実妹の名前は富士子であり、東京女子大学英语専攻部を卒業したと一致している³⁾。

「富士子さんは今日はお家？」

「妹？ えゝ、母が少し不良いもんだから。」

(中略)

「富士子さんは大学で何をやるんだね？」

「英文科に行くと言つてた。」

また、「父」については、次のように一年前に死んだ設定になっており、これも、小林の父豊造が大正10年3月20日に亡くなった事実と一致している。

殊に父の苦しみ乍ら死んで行つた事が、謙吉に宗教に対する加成強い反感を抱かして居た。

(①18～19頁)

謙吉は翌日、父の一周忌の法事で、東京に帰る事になつて居た。(①20頁)

そして、この最後の引用箇所の後には、次のような表現が続いている。

高等学校の入学試験を受けなければならないので、皆と別れて一人病院を出たのは、父がもう駄目だと云はれた朝だつた。

総てのものが妙に白けて見える人通りもない未明の街を、「俺が帰る頃には、もう死んで居るだらう」と毛利侯爵の長いセメントの塀に沿ってポロポロ涙を落し乍ら歩いた自分の姿が頭から消えると、医者がギュッと胸を押したがポカンと口を開いた儘息をしなくなった父の顔が浮ぶ。「家に持つて帰る」と京都の伯父が赭い壺からお骨を半紙に移すのを見て身慄ひした事、葬式の済んだ晩、母と妹と三人で黙りこくってお膳を囲んだ時の、三角形の頂点が合はない様な妙にぎこちない淋しさ。——謙吉の追懐は風船玉の様に後から後から出来てはポカリ、ポカリと消えて行つた。(①20頁)

ここに述べられた事柄は、小林が大正10年に第一高等学校の入学試験を受けていること、および、当時小林の住んでいた東京市芝区白金今里町と毛利公爵邸のあった芝区高輪南町とが隣接していること、さらには、父方の伯父清水清一郎が京都に居たこと、といった事実と合致している。

以上のことから、小説「蛸の自殺」が小林の実人生を直接的に反映した私小説であることは明らかだが、最後に、妹の高見澤潤子(富士子の筆名)が後年この小説について述べた言葉を引用しておく。

その頃、兄は同人雑誌「蝨音」に、はじめて小説「蛸の自殺」を発表した。これを志賀直哉がほめたということは、その時は知らなかった。私はそれをよんで、よくはわからないままいい小説だとも思わなかったが、中に出てくる八重子という女性は、すぐに良子をモデルにしたんだな、と解った。八重子の会話に良子がいった言葉などが入っていたからである。良子は、鎌倉にいた叔父の知合いの金持の娘で、私たちは叔父の家で彼女と知り合い、夏はよく海岸で一

緒になった⁴⁾。

もはや「蛸の自殺」の表現と小林の実人生との符合は明白であろう。大岡昇平は、創元社版の『小林秀雄全集 第二巻』(昭和25年)の「解説」の中で、「Xへの手紙」(昭和7年)を「思想家の私小説」(310頁)と評しているが、処女小説「蛸の自殺」もまた私小説と呼んで差支え無いものであり、したがって、主人公の「謙吉」は、作者小林秀雄のいわば分身と考えられるのである。

ついで指摘すべきは、主人公「謙吉」が自己の内面・心理を分析的に記述した表現の多さである。しかも、そうした表現の多くには、後の小林の批評表現の大きな特徴である「比較・対照のレトリック」⁵⁾が用いられている。以下にこうした表現の中から三箇所を引用する。

今の謙吉には、お前の頭の何処かには必度神様を握まうと云ふ願ひが在るに相違ない、然し其れを得て終へば人間お終ひなんだと云ふ気持で所謂、最後の一つ手前のものにこだはつて居る——と云ふ考へ方は厭だつた。寧ろ奴等は一体どれだけのものを得て居るんだらう、俺は何程の損をして居るんだ——と考へ度かつた。

(①19頁。なお、傍点は小林による。)

謙吉はその単純さに時々苛々してみたものの、結局自分の神経質に腹を立てるのが落だつた。如何して一方に進んで行けないんだらうか。弱い奴だ。然し、それは弱いとか強いとかと粗雑に片付けられる様な問題でなかつた。如何する事も出来ぬ微妙な心理の矛盾だつた。(①22頁)

此んな事で叩き起すのは気の毒だと云ふよりも、寧ろ、そんな些らぬ事で、大仰に夜晩く起しに来なくてもいいではないか、さう思はれは

しないか——と、云ふ妙に執拗な羞恥から、暫く叩くのを躊躇した。(①25頁)

これらの引用箇所における「謙吉」の内面・心理の分析的記述は、先に見たように「謙吉」が作者小林の分身であるとするならば、作者である小林が自身の内面・心理を「謙吉」に仮託して吐露した表現だと考えられる。しかも、「比較・対照のレトリック」を用いることにより、その内面・心理がどのようなものであるかを、より明確に記述しようとしているのである。

さらに、独断的とも言える価値判断の表現が多いことも、この小説の指摘すべき大きな特徴である。価値判断を行うのは主人公「謙吉」だが、それは、結局は作者である小林の価値判断と見做すことができる。

ふと、謙吉は世間で「夢の様だ」と言ふのが妙に思はれた。音や色は勿論、近頃は匂ひまで感ずる自分の夢の鮮かさを思ふ一方、夢に現はれる自分といふものの真実さよりしても其う云ふ様な言葉は怪しからんと思ふのだつた。

(①14～15頁)

この引用箇所小林は、自分の見る夢に照らし、夢が現実離れたものではなく、「真実さ」を持ったものであることを述べているのだろうが、「夢の様だ」という言葉に対して「怪しからん」という価値判断までが行われていることに注目すべきであろう。同様に、次の引用箇所では、下品な舞台を見て笑う人々に対する道徳的な価値判断が行われている。

「おん馬鹿様——見せう かあ——」

「おん馬鹿様——見たい——」

舞台の上では、皺だらけの白装束の神主と、

赤い禪を出したちよん髷の馬鹿が踊つて居た。それを取り囲んだ、猥褻な科白に歯を露き出して居る顔の集団に、何んとも云へない嫌悪の情が湧いた。脂汗でテカテカ光る黒い顔も、お白粉を塗つた女の顔も、皆一様な醜さで笑つて居た。謙吉はいくら見ても見足りないと思ふ風に憎悪の視線を注ぐのだつたが、その視線が照明燈でもあるかの様に考へたのが滑稽になると共に、自分の子供らしい道徳的優越とでも云ふ様な感情に腹が立つて来た。(①16～17頁)

さらに、次の例では、宗教に対する否定的な価値判断を読み取ることができよう。

要するに人間は人間なんだ。幾時の間にか波打際に沿つて歩いて居た。彼等の宗教生活などと云ふものが自分から不思議に遠い様に思はれた。中学時代に感傷的な憧憬から宗教を求めると云ふ事は彼にも経験があつたから首肯されるが、今の彼には例へ何んな生活上の転機があつたにしろ、宗教などと云ふものの中に暢気に沈潜して居ると云ふ事は考へられなかつた。知り度い、が、信じ度くはない。(①18頁)

これらの価値判断には、もちろん客観的な基準などは無い。あくまでも小林の個人的な嗜好にもとづいた価値判断であることを付言しておく。

最後に、小説「蛸の自殺」の表現の特徴として指摘できることは、直喩(明喩)や隱喩(暗喩)、活喩(擬人法)といった比喩表現がきわめて多い、ということである。たとえば、この小説の冒頭の一段落は次のとおりである。

足の裏の焼け附く白砂からは、焰の様な陽炎が燃えて、其の彼向に、仮睡んだ緑の斑点を附けた赤い壁の岬が上に頭を出した入道雲と一緒

にブルブルと慄へて居る。海流の縞を鮮やかに浮べた海は、太陽の直射に全然参つて終つたと云ふ形で、波は物狂はしく渚に這上つては、砂の熱さに驚いて引き下る。と後に砂の面が嘲笑する様にギラリと光る。——真昼の海岸の烈しい色彩が、寝不足で疲れた謙吉の神経にクラクラと幻覚を起させた。(①11頁。ただし、下線は引用者による。以下同様。)

わずか一段落四文にこれだけ多くの比喩が用いられているのである。もちろん、この作品の全体に亘って比喩は多用されており、全てをここに引用することはできないので、もう一箇所だけを引用しておく。

波の泡が海岸線に平行に真白な蛇の様な曲線を幾重も作つて、その闇に消える彼方には、葉山辺りの灯火が明滅して居た。月の全反射を受ける部分は、蛇の鱗が金色に光つて幾つも重り合つて走つて居る。浜には何処かの新聞社主催の海浜博覧会と云つた様なものが開かれて居た。蒼い月の光と、葦簾張の店の赤い電灯の光が交雑する下に、膨り附けられた様に浮き上つて見える砂上一面の下駄の跡が謙吉を厭な気持ちにした。(①16頁)

以上述べてきた小説「蛸の自殺」の表現の特徴を整理すると、次のようになる。

- (1) 作者・小林秀雄の実人生を如実に反映した私小説である
- (2) 作者・小林秀雄が主人公「謙吉」に仮託した、自己の内面・心理の分析的記述が多い
- (3) 作者・小林秀雄の独断的とも言える価値判断の記述が多い
- (4) 直喩(明喩)、隱喩(暗喩)、活喩(擬人法)

などの比喩がきわめて多く用いられている

ここに挙げた四つの特徴のうち、(1)～(3)の特徴は、いずれも作者である小林秀雄が自己を語ろうとするものであるから、表現の自己表出性の高さとしてとらえ得るものである。また(4)の特徴にしても、吉本(2001)によれば、比喩は表現の自己表出を高めるものであるから、結局は(1)～(3)の特徴と同じく、高い自己表出性の表現としてとらえることができる。したがって、(1)～(4)の特徴を併せ持った小説「蛸の自殺」は、表現の自己表出性がきわめて高い作品と考えられるのである。

III

ここでは、IIで析出した小説「蛸の自殺」の表現の特徴を踏まえて小林秀雄の文体を考察することにより、小林が小説を志向していたにもかかわらず、何故批評を書いたのか、言い換えれば、小林が「小説家」から批評家へと転位した理由およびその過程を明らかにしたい。

それに先立って、この問題についてはIで述べたとおり、すでに多くの論考が書かれているので、比較的最近の論考の中で主立ったものを確認しておく。

山崎(1992)は、小林が佐藤春夫について「才能は依然として氏にとって一つの重荷なのではあるまいか。」(「佐藤春夫論」昭和9年、③117頁)と述べていることを引きながら、「小林秀雄は才能の過剰なるがゆえの苦しみを、むしろ自分自身に引き付けて考えているはずである」(219頁)ことを指摘したうえで、次のように述べている。

「批評家小林秀雄」こそまさにこの苦しみの中から生まれてきたのである。言い換えれば、

批評家小林秀雄は、小説家小林秀雄の失敗と挫折を背景にして生まれてきたのである。佐藤春夫における才能の過剰なるがゆえの悲劇は、小林秀雄の悲劇でもあったのである。(219頁)

要するに、小林は、「才能の過剰なるがゆえ」に、小説家になることに失敗・挫折し、批評家になった、というのである。

また、関谷(1994)は、「小林秀雄の文学的出発が『一つの脳髓』(大13・7)をはじめとする小説にあり、それらが批評意識に支えられている作品であるということはいさしばしば指摘されてきた。これらの初期小説に、批評へと向かわざるをえぬ小林の『宿命』を読みこむことは、さして困難なことではない。」(21頁)と述べたうえで、最終的には、「一言でいえば、小説という夢は批評という『宿命』に破られたのである。」(34頁)としている。ここで言われている「宿命」とは、小林の初期の批評のキーワードであり、関谷(1994)は、たとえば小林が、「かうして私は、私の解析の眩暈の末、傑作の豊富性の底を流れる、作者の宿命の主調低音をきくのである。この時私の騒然たる夢はやみ、私の心が私の言葉を語り始める、この時私は私の批評の可能を悟るのである。」(「様々なる意匠」昭和4年、①137頁)と述べた、いわば批評の原理を小林自身に適用しているのである。

さらにまた、井口(2001)は、次のような明快な答えを導いている。

では、小林秀雄はなぜ、批評家になったのか。「前史」の誘惑を拒んで、批評家・小林秀雄の誕生の瞬間を注視するなら、私には、解答はただ一つのように思われる。それは、小林秀雄の「私」が、批評文にしか定着しえないような「私」だったからだ、と。(23頁)

ここで井口(2001)の言う「批評文にしか定着しえないような『私』」とは、先の「様々なる意匠」の一節に頻出していたような、「二人称的な関係の場に依存しない、いわば絶対的な一人称」(24頁)のことであり、「自意識の構造と同じ形をしている」(24頁)ものである。このような「私」は、「己れの夢を懐疑的に語る」(「様々なる意匠」①135頁)批評においてのみ、定着することが可能だった、ということである。

いずれの論考も、独自の観点から相応の根拠をもって批評家・小林秀雄の誕生を説明しており、首肯すべきところが大いにあるのだが、結局は、関谷(1994)に見られたような、小林秀雄の「宿命」という一点に収斂していくのではなかろうか。本稿では、また別の観点、すなわち、小林秀雄の文体という観点からこの問題を考察する。なお、ここで言う文体とは、拙稿(2001)で分析・考察したように、「言葉と不可分の関係にある思考の結果生じた思想としての言葉」(85頁)と規定し得るものであるが、表現主体による表現行為の結果としての客体的存在である表現^{スタイル}(されたもの)の姿(何がどのように表現されているか)のみならず、表現主体の表現行為の過程における思考^{スタイル}の型(ものとをどのように考えるか)をも包摂するものである⁶⁾。このような文体のとらえ方は、たとえば次の引用箇所に見られるような、言葉と思考と思想とを一体のものと見做す小林の考えと合致するものである。

先づ考へ次にこれを言葉にするといふ呑気な考へ方から文学者は出なくてはならない。さういふ呑気な考へ方が、例へば画家についても、画で表現しようとする思想が先づ画家の精神のうちにあり、これを色で翻訳したものが画だといふ風な考へ方をさせるのであるが、画家は実際には決してさういふ事をしてはゐない。色を

塗つて行くうちに自分の考へが次第にはつきりした形を取つて行くのである。言葉を代へれば、彼は考へを色にするのではなく、色によつて考へるのである。文学者に於ける言葉も亦画家に於ける色の様なものでなければならないのであつて、これは文学者のうちでも一番純粋な詩人の仕事を考へればよくわかる様に、詩人の精神が言葉を馳駆するといふより寧ろ言葉といふものが詩人の精神を常に導いてゐるのだ。(「文章について」(原題「現代文章論 1」)) 昭和15年、⑦56～57頁)

文体を上のようにとらえたならば、小林が小説を書くことに挫折し批評を書いた理由は、結局、小林はそもそも小説の文体を持っていなかった、ということになるのではなからうか。小林は、「蛸の自殺」から二年後の大正13年に「一ツの脳髓」いう小説を書いている。この小説もまた小林の実人生と重なることの多い、私小説と呼んで差し支えの無い作品であるが、ここには次のような一節がある。

三年前父が死んで間もなく、母が咯血した。私は、母の病気の心配、自分の痛い神経衰弱、或る女との関係、家の物質上の不如意、等の事で困憊してゐた。私はその当時の事を書きたいと思つた。然し書き出して見ると自分が物事を判然と視てゐない事に驚いた。外界と区切りをつけた幕の中で憂鬱を振り廻してゐる自分の姿に腹を立てては失敗した。自分だけで呑み込んでゐる切れ切れの夢の様な断片が出来上ると破り捨てた。(①41頁)

ここに述べられていることは、小説を書くことの不可能性である。とりわけ注目すべきは、「然し書き出して見ると自分が物事を判然と視てゐな

い事に驚いた。」という箇所であろう。小林は、ものごとを、小説を書くようには見ていないのである。つまり、小説を「書きたい」のだが、そのようなものごとにとらえ方をしていないがゆえに、「失敗し」て「破り捨てた」のである。「一ツの脳髓」が小林の実人生をそのまま反映した私小説であるとするならば、この引用箇所は、小林が小説の文体を持っていなかったことを示すものであり、また、小林がそのことを自認していたことを示すものでもある。

小林は、昭和3年、出奔していた先から妹の富士子(高見澤潤子)に宛てた手紙の中で、妹の書いた小説を批評して次のように述べている。

小説よんだ、仲々器用にはつきり描けてゐる、実用的な批評は一切止めよう、そんなものはする興味が目下全くないのだ、styleの事は今僕は自分で己のstyleを見失つてゐるので言ひたくないが、描写の粗雑の所が処々にある、もつともつと念入りに描く必要がある、大体、描写といふものは、心の描写でも物事の描写でも、出来るだけ忠実に生々と書きとばしあとで不要也と認める処を消して行くより他に方法といふものは無ささうである⁷⁾。

小林がここで「styleの事は今僕は自分で己のstyleを見失つてゐるので言ひたくない」と述べていることも、先の例と同じく、小林が小説の文体を持っていなかったことの裏付けとなるのではなからうか。小林は、小説が「書きたい」のであり、実際この昭和3年の時点までに、「蛸の自殺」、「一ツの脳髓」、「飴」(大正13年)、「女とポンキン」(大正14年)という四篇の小説を書いている。にもかかわらず、「今僕は自分で己のstyleを見失つてゐる」と自省しており、これは、己の文体が小説のそれではないことを自ら認めた言葉と解する

ことができよう。小林は、この時点で、「やつぱり小説が書きたいといふ助平根性を捨てる」⁸⁾べきかどうか悩んでいたものと考えられる。

では、「蛸の自殺」をはじめとする小説が書かれた時期の小林秀雄の文体は、小説のそれではないとすれば、どのようなものであったのか。「蛸の自殺」の表現の特徴 1)～4)にもとづいて以下に考察する。

まず、Ⅱの最後で、(1)～4)の特徴が自己表出性の高さというようにまとめられることを述べたが、小林の考えによれば、批評とは自己を表出することである。「様々なる意匠」には、次のように述べられている。

人は如何にして批評といふものと自意識といふものとを区別し得よう。彼(ボオドレエール—引用者註)の批評の魔力は、彼が批評するとは自覚する事である事を明瞭に悟つた点に存する。批評の対象が己れであると他人であるとは一つの事であつて二つの事でない。批評とは竟に己れの夢を懷疑的に語る事ではないのか！

(①135頁)

同様のことが、「アシルと亀の子 Ⅱ(原題「アシルと亀の子」)」(昭和5 年) では、次のように述べられている。

批評するとは自己を語る事である、他人の作品をダシに使つて自己を語る事である。

(①211頁)

これらの引用箇所において、小林は、批評とは何であるのかをいわば定義しているのだが、自己表出性の高さという「蛸の自殺」の表現の特徴は、この「自己を語る」という定義と合致するものである。

また、小林は、昭和39年、長年批評を書いてきた自分自身の仕事を振り返り、批評とは何かを述べた文章の中で、次のように述べている。

ある対象を批判するとは、それを正しく評価する事であり、正しく評価するとは、その在るがまゝの性質を、積極的に肯定する事であり、そのためには、対象の他のものとは違ふ特質を明瞭化しなければならず、また、そのためには、分析あるひは限定といふ手段は必至のものだ。

(「批評」⑬15頁)

これは、「批評・批判」という言葉の本来の意味を、「クリチック」という外来語の原義に立ち返って述べた箇所であるが、重要なことは、小林が、批評にとって「分析あるひは限定といふ手段は必至のもの」と考えていた、ということである。このことと、先の(2)の特徴、すなわち、小林が自己の内面・心理を分析的に、しかも、「比較・対照のレトリック」を用いてより明確に記述した表現が多い、ということとを考え合せたならば、この(2)の特徴もまた、小林の文体が批評のそれであったことを示していると考えられるのではなかろうか。

さらにまた、先の「アシルと亀の子 Ⅱ」からの引用箇所の直前には、次のようにある。

物指で何かを計ればその何かは何んでも物指の結果になる事は必定である。人は芸術的問題の決定に於いて、批評とは物指を使ふだけでは足りないといふ事を考へるべきである。

(①211頁)

そして、「様々なる意匠」では、この「物指」の問題について、次のように述べている。

「自分の嗜好に従って人を評するのは容易な事だ」と、人は言ふ。然し、尺度に従って人を評する事も等しく苦もない業である。常に生き生きとした嗜好を有し、常に潑刺たる尺度を持つといふ事だけが容易ではないのである。(中略) 生き生きとした嗜好なくして、如何にして潑刺たる尺度を持ち得よう。(①134頁)

つまり、批評においては、「物指」や「尺度」といった客観的基準によってものごとを評価するのではなく、自らの「生き生きとした嗜好」にもとづいて評価すべきである、と小林は考えていたのである。この小林の考えは、所謂印象批評を是とするものであるが、重要なことは、この考えが小説「蛸の自殺」において、(3)の特徴となつてすでに表現に現れている、ということである。(3)の特徴とは、作者・小林秀雄の独断的とも言える価値判断の記述が多い、というものであったが、批評が井口(2001)の定義するように「価値判断にかかわる言説」(7頁)で、しかも、その価値判断が自分の「嗜好」にもとづいて行われるとするならば、この(3)の特徴もまた、小林が批評の文体を持っていたことを示していよう。

以上の三点から、小林の文体は、元来批評の文体であった、と言えるのではなかろうか。小林は、批評の文体を持っていたにもかかわらず、小説を書こうとし、実際数篇の小説を書いたのであるが、しかし、それはやはり無理なことであり、当然の帰結として、「自分で己のstyleを見失つて」しまい、小説を書くことを断念せざるを得なくなったのである。別の言い方をすれば、小林が小説を断念して批評を書いたのは、その文体ゆえの必然であった、ということである。小林自身、自分が批評を書くようになった経緯および批評家の条件について、次のように述べている。

文学者といふものは、皆、やりたい仕事を、まづ実地にやるのである。私も、批評といふものが書きたくて書き始めたのではない。書きたいものを書きたいやうに書いたら、それが、世間で普通批評と呼ばれるものになつた。それをあきもせず繰返して来た。批評を書くといふ事は、私には、いつも実際問題だつたから、私としては、それで充分、といふ次第であつた。しかし、書きたいやうに書くと、批評文が出来上つてしまつて、それは、詩とか小説とかの形を、どうしても取つてくれない。といふ事は、私自身に批評家気質と呼ぶべきものがあつたといふ事であり、この私の基本的な心的態度とは、どういふ性質のものか、といふ問題は消えないだらう。(「批評」⑬13頁)

空言を吐くまいとして、自分の仕事の支へとなつた具体的な確実な条件を求めて行くと、自分の批評家的気質と生活経験との他には、何も見つかりはしない。しかも、両方とも明言し難い条件である。(「批評」⑬14頁)

小林がここで、「書きたいものを書きたいやうに書いたら、それが、世間で普通批評と呼ばれるものになつた。」「書きたいやうに書くと、批評文が出来上つてしまつて、それは、詩とか小説とかの形を、どうしても取つてくれない。」と述べていることは、きわめて重要である。つまり、小林は、自分が批評以外の文体を持っていなかったと言っているのである。そして、そのことを指して、「批評家的気質」と呼んでいるものと考えられる。なお、ここで小林の言う「実際問題」・「生活経験」とは、たとえば次の引用箇所に見られるような、小林に批評を書くことを要請する、実生活上の問題や経験のことであろうが、批評の文体を持たなければ批評を書いて生活することは

できないのであって、やはり、批評の文体を持っていたことが根本であろう。

僕は学校を出てから、金がなくなってお袋を養わなきゃならない。そのために文芸時評を書いた。それが一番確かな動機です。思いきり悪口を言えば、評判を取るだろうと思ってやったんだ。(「座談／コメディ・リテレール 小林秀雄を囲んで」昭和21年、⑧15頁)

以上のように、小林が小説を書くことを断念して批評を書いた理由は、結局のところ、小林が小説の文体を持っておらず、批評の文体を持っていたから、ということになる。したがって、小林は、「小説家」から批評家へと転位したのではなく、元来批評家であった、と考えられるのである。なお、付言すれば、ここで得られた結論は、「蛸の自殺」が小説ではなく批評である、ということの意味するものではもちろんない。小説か批評かというジャンル分けの問題は、表面的な形式の問題に過ぎない。つまり、「蛸の自殺」は、批評の文体を持った小林が、小説の形式に則って書いた作品であり、あくまでも小説なのである。その意味では、「蛸の自殺」は、批評家の書いた私小説と呼べるのではないだろうか。

IV

本稿では、小林秀雄の処女作「蛸の自殺」の表現を分析し、その文体を考察することにより、小林が元来批評の文体を持った批評家であることを明らかにするとともに、このことが、小林が小説を志していたにもかかわらず批評を書いた理由であると結論付けた。

しかし、小林は、昭和4年に「様々なる意匠」で本格的な文壇デビューを果し、「所謂文学界の

独身者文芸批評家たる事を希ひ、而も最も素晴らしい独身者となる事を生涯の希ひとする」(①137頁)ことを宣言した後も、「からくり」(昭和5年)、「眠られぬ夜」(昭和6年)、「おふえりや遺文」(昭和6年)、「Xへの手紙」(昭和7年)等の小説を書いている。関谷(1994)は、このことについて、「小説家を夢みて文学的出発をした」小林の「見果てぬ夢の追求だった」(33頁)と述べている⁹⁾が、では、小林がこうした「夢」を完全に断ち切ったのはいつであるのか。最後に、小林が批評を書くことを真に「生涯の希ひ」と思い定めた時期、つまり、小林が名実ともに批評家となった時期を特定しておきたい。

結論から述べると、それは昭和11年頃と推定される。その根拠は、昭和11年12月5日付の志賀直哉に宛てた手紙に、「僕はこの頃やつと自分の仕事を疑はぬ信念を得ました。やつぱり小説が書きたいといふ助平根性を捨てる事が出来ました。」¹⁰⁾と記していること、また、この年に行われた座談会¹¹⁾での発言に、「小説に対する色気大体まあさういふふうなものとはなくなつたね、前からみると。」(184頁)という発言や「僕だつてはじめ小説を書いたんだよ。だから評論家が俺は一生評論でいゝなと、かう自信がつくのは大変なんだ。これはやつぱり十年を要するよ。」(185頁)という発言が見られること、さらには、やはりこの年に書かれた「中野重治君へ」の中で、「創造的批評といふ言葉を屢々使用したが、この言葉のほんたうの意味がどうやらわかつて来た、つまりそれを実践しようとする覚悟が決して来たのは極く最近の事なのである。」(④84頁)と述べていること、等々である。小林はこの頃に批評家として生きる決意を固めたものと考えられる。

この昭和11年は、正宗白鳥との間で所謂「思想と実生活論争」が行われた年であるが、その契機となった「作家の顔」(昭和11年)の中で、小林

は次のように述べている。

あらゆる思想は実生活から生れる。併し生れて育つた思想が遂に実生活に訣別する時が来なかつたならば、凡そ思想といふものに何んの力があるか。(④15頁)

僕は、今日までやつて来た実生活を省み、これを再現しようといふ欲望を感じない。さういふ仕事が詰らぬと思つてゐるからではない、不可能だと思ふからだ。泥の中を歩いて来た自分の足跡を、どうして今眺められようか。今時私小説の書ける人はきつと砂地を歩いて来たのだらう。僕は自ら省みて、人間とは何物でもないと思つてゐる。たゞこゝに再建すべき第二の魔神について恥しい想ひをしてゐるだけである。

(④16頁)

これらの引用箇所、小説(特に私小説)を書くという夢との訣別を読み取ることは容易であらう。「再建すべき第二の魔神」とは、言うまでもなく批評創造の魔神のことであり、小林は、この時すでに、批評家としての揺ぎ無い自覚ないし覚悟を持っていたものと考えられる。そして、小林にこうした自覚・覚悟を持たせたものは、繰り返しになるが、彼に元来具わっていた批評の文体である。小林は、昭和10年の段階で、批評を書くことの「おほ根のところ」について、次のように述べている。

僕は何故君は創作をやらずに批評を書き始めたかと聞かれたら、次の様に答へる。自分の言ひ度い事が批評の形式を自然ととつたのだ、と。批評と創作とどちらをやつたらいいかを決定するのは、言ひ度い言葉がどちらの形式をとつて流れ出すか、先づ言ひ度い事を言つてみる外

はない。批評文をいかに上手に作らうかといふ事は先きの話で、どんな批評を書くにせよ、おほ根のところは、批評を書くのではなく、言ひ度い事が批評になるのだといふはつきりした自信がなくではならぬと思ひます。

(「批評と批評家」③438頁)

この引用箇所述べていることは、Ⅲで引用した「批評」の一節と同様、自分の文体が批評の文体であり、かつ、そのことが批評を書くことの根本である、ということである。小林は、このことを自覚し、「言ひ度い事が批評になるのだといふはつきりした自信」を持つのに、「蛸の自殺」からおおよそ15年の歳月を要したことになる。そして、小林の文体が批評の文体であつたこと自体は、やはり小林の宿命と言わざるを得ないであろう¹²⁾。とするならば、この約15年の歳月は、小林が自らの宿命に抗つて夢を追求することの不可能を悟り、今度はその宿命を積極的に受け入れられるようになるために必要な時間だった、と考えられる。言い換えれば、小林秀雄は、この時点に至って、己の「宿命の主調低音」をきき、真の批評家になった、と考えられるのである。

註

- 1) 「〈対談〉批評の変遷」『鑑賞 日本現代文学 第34巻 現代評論』(谷沢永一編、角川書店、1983年) 5～6頁。なお、この〈対談〉の初出は、「俳句」1978年3月号である。
- 2) 本稿では、小林の作品からの引用は、註のあるものを除いて『小林秀雄全集』(新潮社、平成13～14年)に拠った。ただし、漢字は、現行のものに改めた。以下、この全集の巻数を○の数字で示す。この引用箇所は、①13頁。
- 3) 本稿における小林の実人生およびその家族・親戚についての記述は、吉田熙生編・新潮社補綴「年譜」『小林秀雄全集 別巻Ⅱ 無私を得る道』(新潮社、

平成14年)、吉田熙生編「文学と生活の履歴 一年譜と著書目録一」『新潮』第80巻第5号(小林秀雄追悼記念号、新潮社、1983年)、『小林秀雄全作品1 様々なる意匠』(新潮社、平成14年)の新潮社出版部(小林秀雄全集編集室)による脚注、高見澤潤子『兄 小林秀雄』(新潮社、1985年)、西村孝次『わが従兄・小林秀雄』(筑摩書房、1995年)等を参照した。

4)『兄 小林秀雄』70～71頁。

5)「比較・対照のレトリック」とは、簡単に言えば、「Xハ、Aデアル。」という主張を強調するために、「Xハ、Bデハナクテ、Aデアル。」と述べるレトリックのことである。筆者は、拙稿(1995)において、評論文の場合、文章レヴェルでのレトリックにはどのようなものがあるのかを考察し、拙稿(1998)では、この文章表表現のレトリックという観点から、小林秀雄の「無常といふ事」(昭和17年)の表現を分析した。その結果、小林の表現特性の一つとして、「比較・対照のレトリック」を多用するという特徴が析出された。

6) 文体のとらえ方は様々であるが、ここに述べた文体のとらえ方は、必ずしも特殊なものではない。たとえば、一般読者向けの啓蒙書である清水(1959)でも、「或る人のスタイルが出来るというのは、その人にとって思惟及び叙述の或る習慣が固定するということである。」(121頁)と述べられていることからわかるように、スタイル(＝文体)は、叙述のしかただけではなく、思惟のしかたをも含むものとしてとらえられている。

7) 高見澤潤子『兄 小林秀雄』66頁。

8) 小林が志賀直哉に宛てた手紙(昭和11年12月5日付)の一節。『志賀直哉宛書簡(志賀直哉全集 別巻)』(岩波書店、1974年)525頁。ただし、漢字は、現行のものに改めた。

9) 小林は、「様々なる意匠」の中で、「文学の世界に詩人が棲み、小説家が棲んでゐる様に、文芸批評家といふものが棲んでゐる。詩人にとっては詩を創る事が希ひであり、小説家にとっては小説を創る事が希ひである。では、文芸批評家にとっては文芸批評を書く事が希ひであるか？恐らくこの事実は多くの逆

説を孕んでゐる。」(①134頁)と述べているが、「文芸批評家にとっては文芸批評を書く事が希ひである。」と断定せず、「逆説」と述べるこの意味ありげな言い回しは、小説と批評、小説家と批評家との間で、自分の進む道に悩む小林の心理が反映したものと考えられるのではないか。

10) 註8)に同じ。

11)「座談会 文学は何を為し得たか 一本年度文壇の総決算一」『文学界』第3巻第12号(文芸春秋社、1936年)。ただし、引用の際、漢字は、現行のものに改めた。

12) 小林は、昭和23年、湯川秀樹との対談において、次のように発言している。「ええ、ぼくも持って生れた自分の素質というものを考える。のみならず、ほんとうの意味の仕事というのは素質のなかでの仕事じゃないかとよく考えます。もしもそうでなければ、これは何か人間が空想しているもので、ぼくは仕事をしているのではないと思う。つまりある自分の素質だとか、運命なんてものが、ある限定された、突破することのできないものが必ず与えられているので、それを肯定して、それと対決して仕事をするのが仕事なんで……そんなものがなくても可能な仕事、というものを空想している人は、仕事をしているのじゃない。ぼくはどうもそういうふうに思う。ぼくは二元論者です。精神というものはいつも物性の制約と戦っていなければいけない。」(対談/人間の進歩について)⑧256頁)この発言は、批評家として批評を書くことが自らの宿命である、と小林自身が考えていたことを示すものと言えるのではなかろうか。

参考・参照文献

井口時男(2001)『批評の誕生／批評の死』講談社

江藤 淳(1961)『小林秀雄』講談社

坂田達紀(1995)「文章表現のレトリック 一評論文の場合一」『国語表現研究』第8号 国語表現研究会

坂田達紀(1998)「小林秀雄『無常といふ事』の表現特性 一文章レトリックの観点から一」『国語表現研究』第11号 国語表現研究会

坂田達紀(2001)「評論文の説得力について」『国語表現

研究』第13号 国語表現研究会
清水幾太郎(1959)『論文の書き方』岩波新書
関谷一郎(1994)『小林秀雄への試み 〈関係〉の飢えを
めぐって』洋々社
吉田潤生(1987)「小林秀雄の『志賀直哉』」『日本文学研
究資料叢書 小林秀雄』3版 有精堂(初出は、
「日本近代文学」第3集、1965年)
山崎行太郎(1992)『佐藤春夫論 三) 小林秀雄の先駆者』
『三田文学』第71巻第28号冬季号
吉本隆明(2001)『定本 言語にとって美とはなにか I・
II』角川ソフィア文庫(初出は、『試行』創刊号
(『試行社、1961年9月)から第14号(1965年6月)
までの連載である。)

